

彙 報

平成28年度広島大学日本語教育学講座言語・文化・教育研究会，特別講演会

◎第18回大会（平成28年4月28日）

○研究発表

【口頭発表】

ジャ ブルブル（博士課程後期2年）

インド人日本語学習者のメタフォリカル・コンピテンスの検討

ーメタファーの理解に着目してー

劉 馨宇（博士課程前期2年）

説明文の内容構造が中国語を母語とする日本語学習者の文章理解に及ぼす影響

ー読解前の構造注目教示を操作した実験的検討ー

【ポスター発表】

柳本 大地（博士課程後期3年）

日本語漢字単語の処理に関する研究

ー韓国人上級学習者を対象とした実験的検討ー

若泉 英里（博士課程前期3年）

サラリーマン川柳の入賞作品に見られる特徴

ー名詞に着目してー

◎第19回大会（平成28年6月30日）

○研究発表

【口頭発表】

帖佐 幸樹（博士課程後期2年）

〈発見〉のニュアンスはいかにして現れるか

ータ形・ル形における用法を踏まえてー

【ポスター発表】

岡本 しおり・勝丸 大規・杉浦 一平

流川のバーにおけるコミュニケーションの観察と考察

岡田 樹・王 晶晶・沈 曉嫣

中国語を母語とする日本語学習者の依頼メールにおける作成時および遅延修正時の修正内容と

修正意識の分析

橋本 浩樹・山本 健太・朱 映琛・鳥居 史高

日本語教科書の会話文にみられる不自然さ

ー「ソウデスカ」を足がかりとした例証的検証ー

夏 逸庭

初対面会話における話題選択の日中対照研究

ー男性同士の会話に着目してー

◎第20回大会（平成28年11月1日）

○講 演

言語の対照と日本語教育 — 移動動詞の文法化を例に —

仁科 陽江 先生

【講演要旨】

我々は、外国語を習ったり教えたり、翻訳をしたりしている時など、知らず知らずのうちに言語を対照している。どの学習者も自分の母語を持ち、加えて第二や第三の言語の知識がある場合も多い。母語干渉による誤用や、学習言語の系統的・類型的近似の度合いと習得の難度の関係なども、身近な問題であろう。言語を幅広く比較対照することで、母語についての認識を深め、言語教育に応用することもできる。しかし、それは単に二つの言語形式を並べればわかるというのではなく、その背景に在るメタ言語的な比較基準を見極め、個別言語を越えた言語の本質に迫るべくして個々の言語現象の洞察と分析を重ねることが必要であると考えます。

本講演では、文法化現象をとりあげ、動詞が機能語化する過程において、一方では言語間で共通する原理があり、他方では動機となる意味素性によって文法化のターゲットが異なることを、言語の対照を行いつつ確認した。移動動詞が補助動詞として構文化に至るメカニズムを明らかにしたことで、言語の概念化に関する多様性と普遍性の一端が浮き彫りになった。

文法化研究として通時の研究が多くみられる昨今であるが、共時的変種としての文法化がサブカテゴリーを形成することは日本語教育の観点からも意味深い。文法化された日本語構文は、ある文法機能を多様に表現することを可能にし、機能的分類も担う。例としてテクル構文をとりあげ、有標性理論による意義付けも行いつつ、そこでは参与者の関係に一定の階層性が支配し、含意の普遍性が存在することも示した。

また、文法化された日本語構文の多くにおいて、現行の日本語教科書では特定の機能しか教授対象とされておらず、周辺の用法については記述がおろそかになっている事実を例示した。周辺の用法として関与する他の構文との有機的な関連付けを行い、相補分布のパラダイムとして視覚化するという形で、教科書やシラバスではばらばらに学習されている文法事項の整理と説明を試みた。

○研究発表

【ポスター発表】

黒田 亮子（博士課程後期3年）

課題遂行中の発話データから見る学習者の特徴

岩井 実里（博士課程前期2年）

ベトナムにおける年少者日本語教育の現状

— 日本語学校の事例を中心に —

2016年度（平成28年度）日本語教育学講座 歳時記

2016年（平成28年）

4月1日	仁科陽江先生 着任
3日	入学式
4日	新入生ガイダンス（学部・大学院）
7日	在学生前期ガイダンス（2年生～過年度生）
16日	新入生オリエンテーション行事（於：広島国際プラザ）
28日	第18回広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育研究会
6月30日	第19回広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育研究会
7月28日	修士論文中間発表会
8月4日	卒業論文中間発表会
9～12日	高山善行先生（福井大学・教授）集中講義
18～19日	オープンキャンパス
22～25日	難波康治先生（大阪大学・准教授）集中講義
29日～9月1日	迫田久美子先生（人間文化研究機構国立国語研究所・教授）集中講義
9月7～8日	大学院教育学研究科（博士課程前期）入学試験（一般選抜・社会人特別選抜）
29日	在学生後期ガイダンス（1年生～過年度生）
11月1日	第20回広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育研究会
8日	就職ガイダンス 講師：梶原恭平氏（広島経済リポート 平成17年卒） 田上雄大氏（青年実業家 経済学部）
17～18日	AO 選抜（総合評価方式・フェニックス方式）

2017年（平成29年）

2月17日	卒業論文発表会
20日	修士論文審査会
20～21日	大学院教育学研究科入学試験 博士課程前期 （一般選抜第二次・社会人特別選抜第二次・外国人留学生特別選抜） 博士課程後期 （一般選抜・社会人特別選抜・外国人留学生特別選抜）
20～23日	小河原義朗先生（北海道大学・准教授）集中講義
25～26日	広島大学一般入試（前期日程）
3月23日	学位記授与式

日本語教育学講座 教職員名簿

2016年度（平成28年度）

50音順・敬称省略

講座主任 白川 博之

教 授 倉地 曉美 白川 博之 中村 春作 仁科 陽江*
西原 大輔 畑佐由紀子 松見 法男 柳澤 浩哉

准 教 授 永田 良太 西村 大志 渡部 倫子

講 師 金 愛蘭

助 教 陳 嫻如** ババロラ・ミッキー・アムネ

事務補佐員 山田 典子

教務補佐員 横山 千聖***

*2016年度より当講座所属

**2016年7月まで当講座所属

***2016年8月より当講座所属

非常勤講師授業科目等

〈学部〉

日本語の変遷 高山 善行 先生（福井大学・教授）
日本語の音声と発音 小河原義朗 先生（北海道大学・准教授）
日本語学習とマルチメディア 難波 康治 先生（大阪大学・准教授）

〈大学院〉

日本語教育方法学特講Ⅰ 迫田久美子 先生（人間文化研究機構国立国語研究所・教授）

2016年度（平成28年度）論文題目一覧（学生番号順）

博士論文（2016年度）

氏 名	指導教員 (主査)	称 号	論 文 題 目
当銘 盛之	松見 法男	博士（教育学）	中国語を母語とする日本語学習者における中日同形異義語の処理過程 －中日2言語間の音韻類似性と意味関連性を操作した実験的検討－
岡崎 渉	畑佐由紀子	博士（教育学）	日本語の雑談における母語話者と上級学習者によるスタイルシフトの研究 －非デスマス形の指標的機能の観点から－
于 君	中村 春作	博士（学術）	軍記物語に描き出された武士像 －『平家物語』と『太平記』における－
SYAHRUR MARTA DWISUSILO	西原 大輔	博士（学術）	ジャワ時代の武田麟太郎
柳本 大地	松見 法男	博士（教育学）	韓国語を母語とする日本語学習者の日本語漢字単語の処理過程 －韓日2言語間の形態異同性と音韻類似性を操作した実験的検討－

修士論文（2016年度）

氏 名	指導教員	論 文 題 目
本田 雅美	畑佐由紀子	異なる種類の訂正フィードバックの効果比較 －項目の特性に注目して－
若泉 英里	畑佐由紀子	おしゃべり型活動の学び －日本人と在住外国人の関係性とやりとりの内容に着目して－
朱 映琛	永田 良太	日中の関連広告と謝罪広告に関する比較研究 －外資系企業の関連広告と謝罪広告を分析資料として－
劉 馨宇	松見 法男	中国語を母語とする上級の日本語学習者の文章理解に及ぼす視点の教示・転換の効果 －文章内容に関する視点と読解目的に関する視点を操作して－
王 晶晶	松見 法男	中国人学習者における日本語漢字単語の記憶に及ぼす母語の漢字知識の影響 －中日2言語間の形態・音韻・意味の類似性を操作した実験的検討－
藤田 恭兵	松見 法男	繰り返し音読が中国語を母語とする上級日本語学習者の文章理解に及ぼす影響 －学習者のワーキングメモリ容量を設定した実験的検討－
岡本しおり	西村 大志	情報化社会を生きる若者 －ブリクラにみる現代の「わたし」のあり方
徐 暢	松見 法男	中国語を母語とする日本語学習者の文章聴解におけるメモ行為の効果
徐 齡	松見 法男	中国語を母語とする上級日本語学習者の双方向の翻訳再認識課題における日本語漢字単語の処理過程 －聴覚呈示事態における中日2言語の同形語の種類と音韻類似性の影響－

沈 曉嫣	松見 法男	日本語文章のシャドーイング遂行成績に及ぼす事前課題としての音読と黙読の効果 －中国語を母語とする日本語学習者の作動記憶容量を設定した実験的検討－
李 晨昕	畑佐由紀子	中国人日本語学習者の感謝場面における言語使用 －感謝表明場面に着目して－
夏 逸庭	永田 良太	中国語を母語とする日本語学習者の言語的あいづちと非言語的あいづち －形式とタイミングに着目して－
勝丸 大規	西原 大輔	林羅山は『徒然草』をどう読んだのか －注釈本『野槌』における「ころ」をめぐる記述を手がかりにして
霍 紅雪	松見 法男	読解前の質問が中国語を母語とする日本語学習者の文章理解に及ぼす影響 －テスト時期と自由再生言語の視点から－
鳥居 史高	倉地 曉美	異文化に主体的に働きかける新しい留学生像の構築： あるムスリム留学生の事例研究
橋本 浩樹	白川 博之	中国語を母語とする日本語学習者が漢語サ変動詞において誤用を犯す要因 －「させる」形に着目して－
杉浦 一平	西村 大志	近代家族の終焉の先に －2000年代の日本映画にみる－
岡田 樹	松見 法男	韓国語を母語とする初級日本語学習者の日本語漢字単語の記憶における初期テストを用いた検索経験効果 －テスト時期と単語の音韻類似性を操作した実験的検討－

卒業論文（2016年度）

氏 名	指導教員	論 文 題 目
権田 祥枝	松見 法男	日本語文章のシャドーイングと要約訓練が児童の読解力の育成に及ぼす効果 －小学4年生の年少日本語学習者を対象として－
原 一輝	西村 大志	寿司屋、サーモンを握る
遠藤あゆみ	畑佐由紀子	第二言語としての日本語教育における訂正フィードバックとアップテイク －教師の指導経験の違いに着目して－
中原 佳保	西村 大志	落語「野ざらし」にみる伝統のゆくえ
西村 一紗	金 愛蘭	若者言葉としての「～系」の意味・用法について －「頑張ってる系」と「意識高い系」を例に－
佐藤 朱華	金 愛蘭	日韓第二言語学習者のSNSやり取りにおけるコードスイッチング
鈴木 拓磨	西原 大輔	横光利一『旅愁』『欧洲紀行』から見るヨーロッパ体験
石田 真子	松見 法男	日本語学習者の日本語運用能力の向上とメタ認知的行動の関連性
板谷 智美	西原 大輔	佐藤春夫の台湾原住民像を探る －森丑之助との関係を中心に－

森 美咲	西原 大輔	萩原朔太郎と萩原栄次の関係性 ー白秋と関連させてー
山下 輝海	倉地 曉美	成長期の文化間移動が文化的アイデンティティに与える影響 ー3名の成人大学生を対象にー
高築 隼人	松見 法男	中国語を母語とする上級日本語学習者における作動記憶容量と聴解力の関係 ー学習者の聴覚的語彙力の視点からー
土取 奈央	金 愛蘭	「ワヤ」の意味・用法の変容について ー広島県における使用実態の調査ー
牛尾 瑞貴	中村 春作	明治初年の中学校における教授内容の分析 ー『中学校教則大綱』準拠の「教授要旨」を用いてー
西蔭 麻里	永田 良太	感謝場面における感謝表現と謝罪表現の併用
渡邊 愛依	西原 大輔	江戸川乱歩作品における高等遊民像
青野 真美	柳澤 浩哉	自動車カタログの通時態分析 ー記号価値の変化と女性的モデルの拡大ー
小坂 亮介	柳澤 浩哉	国語教育における「批判的思考」の現状と課題
杉原 光	松見 法男	指導者の叱り方が受け手の印象に与える影響 ー日本語の発話速度に着目してー
船橋 夏帆	西村 大志	感情労働の現在と未来
山口 紗喜	永田 良太	「やばい」の使用場面と用法
森川 美祐	金 愛蘭	動詞「ツク」のコロケーションについて
溝邊 光菜子	永田 良太	ファッション誌に見られるカタカナ表記語 ー性差の観点からー
江田 鮎美	西村 大志	バーチャルとリアルの往還 ー刀の擬人化とその消費にみるー
衆樹 玲	倉地 曉美	中国人留学生の対日観形成に関する質的研究
榎本 奏	西原 大輔	与謝野晶子『みだれ髪』における琴の表象
桑原 英利	中村 春作	竹内好における「民族」の問題について
柳谷 萌	西村 大志	子どもの名づけと現代社会 ー「個性化」のはてにー
樺山菜乃花	倉地 曉美	日本人学生と留学生の交流：日本人学生3人の事例を通して
田中 恵美	白川 博之	マンガに見る指示語の選択と話し手の感情の関連 ー話し言葉におけるコ系の選択に着目してー
小川 美穂	松見 法男	説明予期教示が日本語文章の読解に及ぼす効果 ー説明の視点呈示の有無を操作した実験的検討ー
佐藤 優介	松見 法男	日本語説明文の読解における効果的な学習指導法 ー読解前教示に着目してー
松村 美月	柳澤 浩哉	太宰治の女性一人称告白体の方法 ー『女生徒』を中心にー
寺尾ひかる	永田 良太	歌詞に見られる性差 ー「別れ」の歌に着目してー
生藤 雅愛	金 愛蘭	カタカナ語の使用・表記への評価にかかわる書き手情報について
伊勢田研太郎	永田 良太	「野球中継」におけるテレビとラジオの言語的特徴

お祝いの言葉

日本語教育学講座主任 白 川 博 之

日本語教育学講座（旧・日本語教育学科）は、今年度、創設30周年を迎えました。その草創期から講座の発展にご尽力くださった重鎮がまたお二人、今年度末をもって、定年退職されます。倉地曉美教授（異文化間教育学・心理学）と中村春作教授（日本思想史・文化理論）です。両先生がつつがなく定年を迎えられたことを、講座を代表してお慶び申し上げるとともに、本講座の教育・研究・運営に長年にわたって貢献されたことに対して、この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

倉地先生は、学科創設8年目の平成5年4月に立命館大学より助教授として着任されました。以来、24年にわたって、異文化間教育学・心理学の教育・研究に従事され、多くの有為な人材を社会に送り出されるとともに、多くの優れた研究業績を上げられました（詳細については別紙の「略歴・業績」をご覧ください）。先生のご研究は、多文化共生・共存が必要な現代社会にあって、「多文化にひらかれた人材」をどのように育成すればよいのか、文化の多様性に対する寛容な態度はいつどのように形成されるのかといった問題意識で貫かれています。

また、先生は、平成14年4月から同17年3月まで全学の広報委員会委員を務められたほか、平成18年4月から同20年3月までは日本語教育学講座主任を務められて講座創設20周年の記念行事・事業を指揮されるなど、大学の管理運営にも貢献してこられました。

学界においても、多文化間精神医学会の評議員・研究委員会委員、異文化間教育学会の理事・編集委員会委員などを歴任され、学会の運営と発展に貢献されました。昭和61年に国際理解教育奨励賞（優秀賞）、平成12年に国際理解教育賞（優秀賞）を受賞されるなど、学界でも高い評価を得ていらっしゃいます。

さらに、平成18年4月から同25年3月まで（財）ひろしま国際センター評議員、平成22年4月から同25年まで広島大学平和構築連携事業（HiPec II）実施委員を務められるなど、ご専門の学識を活かして社会貢献にも尽くされました。

専門分野が異なるため、同僚として接してきた先生の横顔しか存じ上げませんが、めまぐるしく変容する学内外の状況に振り回されず、学生を教育する上で何が一番大事なことなのか、また、異文化間の理解をめぐる諸問題の根底にあることはどういうことで、われわれは何を考えなければならないのかといった、妥協のない深い思索をいつも巡らせていらっしゃるようにお見受けしました。後輩の教員としては、ごまかしが効かない、ある意味で、怖い先生でした。心掛けの悪い学生も同じようなことを感じていたに違いありません。

その一方で、留学生や、日本人でもメンタルな問題を抱える学生には、温かい心をもって寄り添う先生でいらっしゃいました。指導学生でなくても、学生が元気で楽しく過ごしているかどうか、いつも気に掛けていらして、廊下ですれ違ったときなどに（先生と分かち難く結びついた、あの京都弁で）よく声を掛けていらっしゃいました。おそらくは、留学生の間でもっとも人気のある教員の一人であったと思います。

われわれ同僚に対しても、普段と違う気配を察知するや、心優しい言葉を掛けてくださるような先生でした。お互いに研究室が同じ階にあったこともあって、私なども元気の出る言葉を数え切れないほどいただきました。これからは、私も少しは見習って、温顔愛語を心掛けなければなりません。

中村先生は、昭和が終わり平成が始まった年、学科創設4年目の4月に、四国女子大学より助教授として着任されました。以来、28年間にわたり、主として日本文化・思想の教育・研究に従事され、社会に多くの優れた人材を送り出されるとともに、別紙のとおり多くの優れた業績を上げられました。先生の研究業績は、近世から近現代に至る日本思想史を中心とするものであり、日本の思想の歴史を東アジア全体の大きな流れのなかに置き直すこと、そしてまた、日本人がどのような言語感覚を持つてものごとを語ったり、自己や他者を発見していったのか、といったことがらに焦点を当てて研究してこられました。

また、校務に関しても、平成23年4月から同25年3月まで日本語教育学講座主任として講座の発展にご尽力くださったのを始めとして、同20年4月から同22年3月まで教育学研究科入試部会副部会長を務められるなど、各種委員を歴任し、大学の管理運営に貢献してられました。

学界においては、平成14年10月から同28年10月まで日本思想史学会評議員、同21年6月から現在まで東アジア文化交渉学会評議員、同28年5月から現在まで日本儒教学会評議員、平成25年4月から現在まで一般社団法人心学明誠舎理事などを務められ、学会の運営と発展に貢献されました。

社会活動では、平成19年1月から同20年12月まで独立法人日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員などを歴任され、社会の発展に重要な役割を果たしてられました。

以下、私事にわたりますが、私も先生と同じく平成元年に着任した、いわば同期生です。赴任した当初は、学科創設から日の浅い時期だったため、学科内には試行錯誤で作って行かなければならないことが多く、いろいろと大変だったという記憶があります。様々な背景をもった個性的な教員が揃っていましたので、学科会議では喧々諤々の議論が繰り広げられていました。師弟関係や先輩後輩の関係にある教員がほとんどいなかったこともあって、特に助教授・講師の元気が良く、会議の席ではもちろんのこと、大学を出ても酒を酌み交わしながら議論に興じていたことが懐かしく思い出されます。

そういった中で、中村先生は、どちらかというと会議の席で言い合うのはあまり好きではなかったようで、肝心なところでは議論を方向づけるような的確な発言をされましたが、基本的には口数が少なく、議論が白熱すればするほど、眉間にしわを寄せてじっと目を閉じていらっしゃるが多かったように思います。お互いに若かったこともあり、よく一緒に飲みに行きました（そのときは打って変わって朗らかなお酒です）が、そうやって精神のバランスを保っていたらよかったのかもしれません。

中村先生は、一言で言って、人徳と良識の人であり、講座会議で議論がもつれたときなどのご発言はだれもが納得ずくで従えるものでした。私も、講座主任を務めた2年間はもちろんのこと、判断に迷ったとき何度先生にご意見を伺いに行ったことか知れません。

このように頼りになる両先生をお送りしなければならないのは、講座の教職員および学生にとって大変残念で淋しいことではあります。講座創設30年に当たるこの年に、草創期から永年にわたって講座を支えてくれたお二人が退職されるのは、まさに感慨深いことです。四半世紀の間の様々な出来事に思いを馳せつつ、この長距離を完走された両先生に心からお祝いの言葉をお贈りします。

倉地 曉美教授 略歴・業績

1. 学歴・職歴等

昭和26年	京都市生まれ
昭和49年 3 月	同志社大学文学部英文学科卒業
昭和54年 1 月	University of Illinois at Urbana-Champaign 大学院教育学研究科修士課程修了
昭和56年 8 月	University Fellow, Latitia Walish Fellow (University of Illinois)
昭和57年10月	University of Illinois at Urbana-Champaign 大学院教育学研究科博士課程修了（教育心理学 科異文化間心理学専攻）
昭和57年10月	Committee on Psychological Studies in Education, Stanford University Postdoctoral Fellow
昭和58年 8 月	Institute for Child Behavior & Development, University of Illinois at Urbana-Champaign 専任研究員
昭和61年10月	立命館大学文学部専任講師
昭和63年 4 月	同大学国際関係学部専任講師
平成元年 4 月	同大学同学部助教授
平成 5 年 4 月	広島大学教育学部助教授
平成13年 4 月	同大学大学院教育学研究科教授
平成29年 3 月	定年により退職

2. 学界・社会活動等

○学界・研究活動

コロンビア大学東洋文化言語学部客員研究員，九州大学教育学部比較教育文化研究施設学外研究員，広島大学教育研究センター研究員，広島大学平和科学研究センター研究員：『文化と認知』研究委員会委員 (University of Illinois)，広島大学教育開発国際協力研究センター研究員。

AERA（American Educational Research Association），多文化間精神医学会，日本教育学会，日本心理学会，異文化間教育学会に所属し，多文化間精神医学会評議員，研究委員会委員，異文化間教育学会理事，編集委員会委員等を歴任。

昭和61年 第11回国際理解教育奨励賞（優秀賞），平成12年 第25回国際理解教育賞（優秀賞）受賞。

○社会活動・学内委員等

（財）ひろしま国際センター評議員，広島大学教育学部，教育学研究科において各種委員会委員，全学委員を歴任し，学部，大学院，大学の運営に参画した。2006年～2008年日本語教育学講座主任。

○学外非常勤（集中講義）講師

大阪外国語大学，同志社大学，神戸大学，東北大学

I. 著 書

〈単著〉

- | | | |
|-----------------|-------|------|
| 1. 『対話からの異文化理解』 | 1992年 | 勁草書房 |
| 2. 『多文化共生の教育』 | 1998年 | 勁草書房 |

〈共編著〉

- | | | |
|-------------------|-------|-------------|
| 1. 『多文化間の教育と近接領域』 | 2006年 | スリーエーネットワーク |
|-------------------|-------|-------------|

〈共著〉

- | | | |
|-----------------|-------|---------|
| 1. 『比較文化キーワード』 | 1994年 | サイマル出版会 |
| 2. 『異文化接触の心理学』 | 1995年 | 川島書店 |
| 3. 『異文化間教育研究入門』 | 1997年 | 玉川大学出版部 |
| 4. 『言語と教育』 | 2004年 | くろしお出版 |

II. 論文

1. Follow-up Studies: Are They Worth the Trouble? (1981) *Journal of Teacher Education*. Vol.32, pp.18-24. With L. Katz et al.
2. A Cross-cultural Study of Maternal Perceptual Attributions & Behavioral Attributions by Parents and Teachers in Japan and the United States: Dynamic Situational Paradigm of Child-rearing Research (1983) University of Illinois at Urbana-Champaign. Dissertation Abstracts International, 43, 9-A, 2939
3. Japanese and American Mothers' & Teachers' Reactions to an Incident Involving a Child in School. (1984) *Journal of Cross-Cultural Psychology*. Sage Publications. Vol.15, pp.321-336.
4. 「幼児期における国際理解と協力、平和の為の教育をどうすすめるか：ある就学前児童の異文化適応の過程に学ぶもの」(1986)『国際理解』国際理解教育研究所 18巻, 3号, pp.28-47.
5. A Cross-cultural Analysis of Teachers' and Parents' Perception of & Attitudes toward Conflict Situations: An Attributional Approach. (1987) *Japanese Psychological Research*, Vol.29, No.3, pp.131-138.
6. 「中級学習者の日本語・日本事情教育におけるグループ研究プロジェクトの試み：異文化間教育心理学の視座から」(1988)『日本語教育』66号, pp.48-62.
7. 「日米の教師と母親の状況判断に関する比較考察」(1989)『異文化間教育』アカデミア出版会 第3号, pp.95-111.
8. 「学習者の『異文化』についての一考察：日本語・日本事情の場合」(1990)『日本語教育』71号, pp.158-170.
9. 「教師と母親の状況判断：日米比較分析」(1990)『立命館国際研究』立命館大学国際関係学部 3巻, 1号, pp.68-88.
10. 「異文化間コミュニケーション能力開発のために：ジャーナル・アプローチの創出とその意味」(1991)『異文化間教育』アカデミア出版会 第5号, pp.66-80.
11. 「ジャーナル・アプローチの展開：日本語・日本語事情教育の新しい方向に向けて」(1994)『日本語教育』82号, pp.123-133.
12. 「国際化時代における『日本事情』教育の課題：グローバル教育の視点から」(1994)『広島平和科学』広島大学平和科学研究センター 17巻, pp.105-126.
13. 「世界の人々との『対話』能力を育てるために」(1995)『国際化の進展に対応したコミュニケーション能力の育成を目指すカリキュラムの開発研究』国立教育研究所 pp.20-24.
14. 「『異文化間教育カウンセリング』への提言：カウンセリングと異文化間教育の接点を求めて」(1995)『留学交流』ぎょうせい 9号, pp.27-29.
15. 「学習援助者の『学び』のプロセス (1)：異文化間教育におけるアクション・リサーチの意味」(1995)『広島大学教育学部紀要』広島大学教育学部 44巻, 2号, pp.173-181.
16. 「異文化間教育学と日本語・日本事情の接点を求めて：回顧と展望」(1996)『異文化間教育』アカデミア出版会 第10号, pp.75-88.
17. 「コミュニケーション能力」(1996)『教職研修：臨時増刊 心の時代の教育 シリーズ No.4「国際化時代で問われる資質と教育課題」』教育開発研究所 10巻, pp.62-66.
18. 「深層面接 (in-depth probe) による留学生の異文化理解と言語習得に関する分析」(1997)『日本語の習得と文化の理解』異文化間教育学会 pp.216-299.
19. 「大学におけるカウンセリングと教育との融合：大学教員と外国人留学生との相互作用」(1997)『大学論集』広島大学 大学教育研究センター 第26集, pp.131-148.
20. 「『内なる異文化』の克服：学習援助者育成のためのジャーナルにおける教師の学び」(1997)『比較教育文化研究施設紀要』九州大学教育学部 50巻, pp.119-136.
21. 「大学での異文化間教育：『内なる異文化』の克服と共生の視座から」(1997)『広島平和科学』広島大学平

和科学研究センター 第20集, pp.127-147.

22. 「留学生の生活指導相談：留学生担当教員と専門教育教員の課題」(1998)『大学論集』広島大学大学教育研究センター 第27集, pp.105-124.
23. 「『内なる異文化』への挑戦：あるマイノリティ学生の学びの過程」(2001)『国際理解』国際理解教育研究所 32巻, pp.81-92.
24. 「ゼノフォビア克服に至る過程：微視的民族誌とケース・カンファレンスの相乗効果」(2001)『広島平和科学』広島大学平和科学研究センター 23巻, pp.73-93.
25. 「教育学と多文化間精神医学とのコラボレーション」(2002)『こころと文化』多文化間精神医学会 1巻 1号, pp.25-32.
26. 「異文化間トランス獲得・向上に至るプロセスとその転機：多文化間教育における大学生の学び」(2002)『異文化間教育』第16号, pp.49-62.
27. 「ボランティアと日本語教師のカルチャー・ステレオタイプ：認識と自己抑制に関する研究」(2003)『広島平和科学』広島大学平和科学研究センター 25巻, pp.81-108.
28. 「日本語教師とボランティアのカルチャー・ステレオタイプに関する調査研究：質問紙調査とインタビュー調査の分析結果から」(2005)『広島平和科学』27巻, pp.117-135.
29. 「文化を理解する能力をいかに育むか：多文化間教育の立場から」(2008)『こころと文化』多文化間精神医学会 7巻, 2号, pp.143-151.
30. 「周縁に生きることの意味：1つのライフヒストリー」(2011)『こころと文化』多文化間精神医学会 11巻, 1号, pp.30-40.
ほか31点(単著58点)

Ⅲ. その他

1. 『暗黙の心理』(1988) 倉智佐一監訳, 創元社 D. Wegner, & R. Vallacher. (1977) *Implicit Psychology*. Oxford University Press.
2. 書評：古田晁他著『異文化間コミュニケーション・キーワード』(1990)『言語』No.8, 大修館書店
3. 「異文化の苦闘の対話」(1992)『電通新聞』
4. 「座談会：多文化間精神医学の今日的課題」(1996)『文化とこころ』多文化間精神医学会 創刊準備号, pp.40-57.
5. 書評：倉八順子著『多文化共生を拓く対話』(2003)『異文化間教育』第17号, pp.119-122.
6. 「日本人の怒り：多文化の視点から考える」(2003)『こころと文化』多文化間精神医学会 3巻, 1号, pp.75-77.
7. 書評：マーガレット・ロック著, 江口重幸他訳『更年期：日本女性が語るローカル・バイオロジー』みすず書房 (2006)『こころと文化』多文化間精神医学会 5巻, 1号, p.89.
8. 「異文化理解」(2012)日本比較教育学編『比較教育学辞典』東信堂
9. 書評：松尾千明編著『多文化教育をデザインする：移民時代のモデル構築』勁草書房 (2014)『異文化間教育』第40巻, pp.150-152.
ほか17点

中村 春作教授 略歴・業績

1. 学歴・職歴等

昭和28年	徳島市生まれ
昭和51年3月	広島大学文学部文学科（中国語学・中国文学）卒業
昭和53年3月	広島大学大学院文学研究科中国文学専攻博士課程前期中途退学
昭和56年3月	大阪大学大学院文学研究科日本学専攻（日本文化学）博士課程前期修了
昭和59年3月	大阪大学大学院文学研究科日本学専攻（日本文化学）博士課程後期単位修得退学
昭和59年4月	大阪大学文学部助手（比較文化学講座）
昭和61年4月	四国女子大学専任講師（短期大学部）
昭和62年4月	同大学文学部専任講師（配置換）
昭和63年4月	同大学同学部助教授
平成元年4月	広島大学教育学部助教授（日本語教育学科）
平成15年10月	同大学大学院教育学研究科教授（日本語教育学講座）
平成29年3月	定年により退職

2. 学界・社会活動等

○学会役員等

日本思想史学会評議員，東アジア文化交渉学会評議員，日本儒教会評議員，心学明誠舎理事，等

○学内・学外委員等

学内：学生委員会（全学）委員，日本語教育学講座主任，教育学研究科内各種委員会委員，等
学外：独立法人日本学術振興会・科学研究費審査委員，等

○学外非常勤（集中講義）講師

国内：千葉大学，愛知県立大学，立命館大学，京都大学大学院，愛媛大学，等
国外：北京・日本学研究中心（長期および短期），国立台湾大学，台湾・輔仁大学，等

I. 著 書

〈単著〉

1. 『江戸儒教と近代の「知」』	平成14年10月	ぺりかん社
2. 『江戸儒教と近代の「知」』（韓国語版）	平成22年9月	sunin books（seoul）
3. 『思想史のなかの日本語』	平成29年春（刊予定）	勉誠出版

〈編著〉

1. 『「訓読」論－東アジア漢文世界と日本語－』	平成20年10月	勉誠出版
2. 『続「訓読」論－東アジア漢文世界の形成－』	平成22年11月	勉誠出版
3. 『江戸儒学の中庸注釈』	平成24年2月	汲古書院
4. 『訓読から見なおす東アジア』	平成26年7月	東京大学出版会

〈共著〉

1. 『叢書日本の思想家 皆川淇園・太田錦城』	昭和61年10月	明德出版社
2. 『東洋の知識人』	平成7年3月	朋友書店
3. 『情報社会の文化1 情報化とアジア・イメージ』	平成11年2月	東京大学出版会
4. 『東亞近代哲学的意義』	平成14年8月	中国・瀋陽出版社
5. 『近代日本の成立』	平成15年1月	ナカニシヤ書店
6. 『儒教と東亞の近代』	平成19年10月	中国・河北大学出版社
7. 『から船往来－日本をそだてた ひと・ふね・まち・ころ－』	平成21年6月	中国書店

- | | | |
|--------------------------|-----------|-----------------|
| 8. 『豊饒なる明治』 | 平成24年 1 月 | 関西大学出版部 |
| 9. 『文化移植与方法—東亞的訓読・翻案・翻訳』 | 平成25年 3 月 | 中国・広西師範大学出版社 |
| 10. 『岩波講座 日本の思想』第二巻「場と器」 | 平成25年 5 月 | 岩波書店 |
| 11. 『日本思想史講座 5 方法』 | 平成27年12月 | ぺりかん社 |
| 12. 『思想史から東アジアを考える』 | 平成28年 3 月 | 台湾・國立臺灣大學出版中心 |
| 13. 『政道與治道—儒家的政治観』 | 平成28年 7 月 | 台湾・國立臺灣師範大學出版中心 |
- ほか14点

II. 論文

1. 徂徠における「物」について 昭和56.1 『大阪大学 待兼山論叢』第15号 pp.1-24 単著
 2. 荻生徂徠の「鬼神」論 昭和58.9 『日本思想史学』第15号 pp.30-41 単著
 3. 「壺中の天」説話と他界思想—平田篤胤の『仙境異聞』を中心に— 昭和58.11 『現代思想』第11巻第11号 pp.235-247 単著
 4. 新井白石の『鬼神論』 昭和59.8 『ユリイカ』第16巻第 6 号 pp.194-201 単著
 5. 「風俗」論への視角 昭和63.4 『思想』第766号 pp.102-115 単著
 6. 注釈学の世界像の再検討に向けて 平成4.1 『日本文学』第41巻第 1 号 pp.29-36 単著
 7. 「敬語」論と内なる「他者」 平成6.8 『現代思想』第22第 9 号 pp.130-145 単著
 8. 「東洋倫理」という思想—西晋一郎の所説をめぐって— 平成11.10 『東洋古典學研究』第八集 pp.61-79 単著
 9. 大坂の学藝と徂徠学 平成14.9 『日本思想史学』第34号 pp.16-23 単著
 10. 日本近代知識人の成立と儒学の「知」 平成16.10 『季刊日本思想史』第66号 pp.96-111 単著
 11. 東アジアの古学と荻生徂徠 平成17.6 韓国・『民族文化論叢』第31輯 pp.329-362 単著
 12. 「訓読」再考—近世思想史の課題として 平成17.11 『文学』第 6 巻第 6 号（平成17年11・12月号）pp.72-81 単著
 13. 近代の「知」としての哲学史—井上哲次郎を中心に— 平成19.12 『日本の哲学』第 8 号 pp.25-39 単著
 14. 近代日本の学術知と儒教の再編—近代の「学知」としての「哲学史」の成立— 平成21.2 韓国・『史林』第32号 pp.61-81 単著
 15. 訓読、あるいは書き下し文という〈翻訳〉 平成23.5 『文学』第12巻第 3 号（平成23年 5 ・ 6 月号）pp.52-64 単著
 16. 〈教諭〉社会の東アジア—清・琉球・江戸をつなぐもの— 平成23.7 『説話文学研究』第46号 pp.14-23 単著
 17. 近世日本儒学の言語と論理 平成24.12 『日本の哲学』13号 pp.70-84 単著
 18. 荻生徂徠『政談』の世界 平成25.5 『東洋古典學研究』第三十五集 pp.53-67 単著
- ほか30点

III. 事典・辞典

1. 『日本思想史辞典』平成13.6 ペリカン社 「アジア主義」ほか 6 項目
 2. 『日本歴史大事典 1－3』平成12.7～14.3 小学館 「荻生徂徠」ほか 6 項目
- ほか 2 点

IV. 書評・対談等

1. 村井紀『南島イデオロギーの発生』平成5.1 『日本文学』第42巻第 1 号 pp.88-89
2. [対談] 中村春作・村井紀「文字と共同体—「漢意」のゆくえ」平成5.10 『現代思想』第21巻第11号 pp.34-43

3. 思想史と人称ー野口武彦『三人称の発見まで』が提起すること 平成7.10 『江戸の思想』第2号
pp.158-167
 4. 渡辺浩『東アジアの王権と思想』平成10.9 『日本思想史学』第30号 pp.179-185
 5. 黒住真『近世日本社会と儒教』平成15.9 『日本思想史学』第35号 pp.215-222
 6. グレゴリー・スミッツ著, 渡辺美季訳『琉球王国の自画像ー近世沖縄思想史』平成23.12 『沖縄タイムス』
 7. 「教養」を生きた「知」として捉え直す 平成24.5 『[アジア遊学] 150 アジアの〈教養〉を考える』
pp.126-131
 8. 前田勉『江戸の読書会ー会読の思想史ー』平成26.3 『自由民権』第27号 pp.74-78
 9. 高坂史朗『東アジアの思想対話』平成27.12 『日本の哲学』第16号 pp.120-126
- ほか7点

執筆者紹介

- 白川 博之（日本語教育学講座 教授）
松見 法男（日本語教育学講座 教授）
柳澤 浩哉（日本語教育学講座 教授）
渡部 倫子（日本語教育学講座 准教授）
費 曉東（北京外国語大学 北京日本学研究センター 講師）
徐 婕（北京新東方外語学校 講師）
李 在鉉（文化教育開発専攻 日本語教育学分野 博士課程後期大学院生）
長野 真澄（文化教育開発専攻 日本語教育学分野 博士課程後期大学院生）
森重 里保（言語文化教育学専攻 日本語教育学専修 博士課程前期大学院生）

第27号 紀要編集委員会

永田 良太・横山 千聖

編集後記

『広島大学日本語教育研究』第27号をお届けします。本号には5編の論文が掲載されています。日本語教育学の領域の広さを物語るように、論文の内容は多岐に渡りますが、いずれの論文においても、これからの日本語教育にとって重要な問題が扱われています。

広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座（旧日本語教育学科）は今年度、創設30周年を迎えました。これまでの卒業生・修了生は現在、日本語教育の様々な現場で教育や研究に携わっています。大学院の修了生は本誌に投稿することが可能ですので、それら様々な教育現場の問題意識にもとづく論考が本誌を通して発表されることを期待しています。

また、日本語教育学講座では今年度、ドイツのエアフルト大学から仁科陽江先生をお迎えしました。仁科先生は言語類型論の観点から言語を比較対照することで、言語の普遍性や個別性に関する記述的・理論的研究を行っていらっしゃいます。講座の教職員、学生、卒業生・修了生が一丸となって、これからも日本語教育のために力を尽くしていきたいと思います。

最後になりましたが、この1年も多くの大学、機関、学会等より本講座宛に紀要や機関誌・学会誌等の研究資料をご寄贈いただきました。大切に保管し、教育・研究活動に活用させていただきます。誠にありがとうございました。

（文責：永田）